

# 岬町の偉人 いじん 堀田又吉 ほったまたきち 翁 おう

堀田又吉さんは、1870（明治3）年に生まれました。20才になった時には、自分をやさしく育ててくれたお母さんを助け、しばか柴刈りの仕事で家族をやしなうようになりました。ぜいたくはせず、毎日こつこつ働き、28才の時、奥さんやむすめさんのために新しい家を建てました。

そして、30才になった時、家族を日本に残し、新たな仕事を求めてカナダに旅立つことにしたのです。又吉さんは、カナダの工場でも一生けん命に働いていたのですが、3年後、奥さんが病気でなくなってしまいます。急いで日本にもどった又吉さんは、その後2年間ほど日本でお店を開いてくらしましたが、今度はアメリカに旅立つことを決心します。

まわりの人からもしんらい信頼され、農園の仕事で大成功した又吉さんは、2年後、家族をアメリカによび、幸せに暮らしましたが、43才の時にむすめさんを病気でなくしてしまいます。又吉さん



自身も病気になってしまい、11年間すごしたアメリカから、日本にもどることにしました。又吉さんは、46才になっていました。

日本にもどり、すっかり病気が治った又吉さんは、また、アメリカに行く計画を立て、船のきっぷを手に入れました。しかし、自分が生まれ育った淡輪村の人々が、まずしい生活をしているのを見て、「村を豊かにしたい。村のために役立ちたい。」とアメリカに行くのをとりやめることにしました。

又吉さんは、まず、村長さんや淡輪小学校の校長先生と相談しました。そのころ村には、家の手伝いなどのために学校に行けない子どももいたので、夜に勉強できる教室をつくったのです。教育に力を入れていくことが、村を豊かにしていくことにつながると考え、子どもたちに勉強を教えました。小学校の先生たちも協力してくれ、生徒はどんどんとふえ、教室がせまくなってきました。又吉さんは、自分の土地を差し出し、村人にも協力してもらい、りっぱな『補修学校』を建てました。大阪府にも認められたその学校で、その後15年間、村の子どもの教育を良くするために努力しました。

又吉さんは、子どもだけでなく、大人にも大切なことを教えていきました。こつこつと働くこと、お金を大切にすること、礼ぎ正しくすることなどを教える勉強会を、十数年間、開き続けました。

又吉さんを、一番なやませたのは水不足の問題でした。そのころ村には、小さな池しかなく、わずかな水を取り合うようにくんでいる人々を見るたびに、どうにかならないものかと考えていました。

水くみは、子どもたちの仕事でした。雨の日も、夏の暑い日も、雪のふる寒い日も、にないぼうをかついで水をくみにいきます。せっかく、苦勞して水をくんで来ても、家にたどり着いておけの中を見ると、水がこぼれて、ほとんどなくなっていたこともありました。くんできた水は、台所の水がめにためておきます。うまく運べると、4回ほどで水がめはいっぱいになります。それが家族が一日に使う水の量でした。かぎられた水なので、みんな



な、とても大切に使いました。お風呂は近所の人と交代で入りました。多い時では20人も入るので、最後の人が入るころにはお湯がほとんどありませんでした。

「池が小さすぎるで。もっと大きいのがあったら、ちょっとは、ましなんやろけどな。」  
「わしもずっと気になってたんや。ちょうど、うちの田んぼ、ええところにあるから、これを池にしよう。」

きれいな水を、少しでも楽に手に入れたいと思い、又吉さんは、自分の土地を差し出し、水をためておくための池につくりかえることにしました。

それでも、その池も、日照りのために水がなくなってしまうことが、よくありました。又吉さんは、自分のお金を使って、土地の様子をいろいろ調べ、井戸をほってみたりもしましたが、なかなかうまくいきませんでした。

「カナダに、首ひねったら水が出てくる”水道”というもんがあったで。そなん、だけへんもんかなあ。大阪府にたのんだら、作ってもらえへんかな。」

又吉さんは、カナダで見たような水道を何とか引けないだろうかと考え、大阪府へお願いしてみました。社会課<sup>か</sup>というところにたのんでみると、

「そう言うことでしたら、設計書<sup>せつけいしょ</sup>を出して下さい。」

と言われました。

そこで、又吉さんは、すぐに設計書を作って、もう一度届けてみたら、今度は、  
「土木課<sup>どぼくか</sup>へ出して下さい。」

と言われました。

しかたなく、土木課へ行くと、



「こんな小さな物は水道とは言えません。もう少し、大きな設計をして下さい。」

と言われたので、一から計画をねり直して書類を持って行ったら、今度は、



「計画が大きすぎるから、考え直すように。」

と注意されました。

又吉さんは、村の人たちとも、何度も相談をしました。

「水くみに行かんでも、水が出るって？」

「そんな夢ゆめみたいなこと、ほんまにできんのか？」

「お金はどうするんや？」



「今は大たいへん変やけど、この水道ができたら、毎日水の心配せんでもええんや。冬の寒いときも、夏の暑いときも水くみにいかんでもええんやで。子や孫まごが楽になるんやで。それに、きれいな水がでてくるから、病気になる心配もないんやで。」

「そうか……。水くみの分、仕事できるなあ。子どもらも学校へ行かしてやれるなあ。」

村の人たちは、又吉さんの熱い思いに、気持ちを動かされていきました。

その後も、又吉さんは、断ことられても断ことられても、大阪府にお願いをし続けました。

やっと認められた後も、水道工事のためのお金は、なかなか集まりませんでした。村の人たちの多くは、その日その日をやっと生活していたので、みんながお金を出し合うのはむずかしかったのです。

そこで、又吉さんは、

「みんなが同じだけお金を出さなくてもいい。出せる分だけでいい。」

「お金を出せない家は、その分、働くことにしてはどうや。」

と言いました。



「それやったら、何とかなる。わし、お金はようださんけど、しっかり働かせてもら  
うわ。」

又吉さんは、55才になっていました。自分の田んぼや山を売って工事のためのお  
金を作り、いよいよ水道工事が始まりました。村の人たちは、この工事に出ることを  
『出ぐさり』といい、一生けん命働きました。そのころは、今のような機械もなく、  
つるはしで水道管をうめる穴をほりました。穴の深さは2メートルもありました。

ほった土を運んだり、土を固めたりするのも、  
ぜんぶ手作業でした。とても、大変な工事で  
したが、村の人たちは、みんなでがんばりま  
した。2年間かけて、はじめての『共同蛇口』  
が完成しました。



「ああ、お金がふってきた。お金がふってきた。」

初めて蛇口から水が出たとき、村の人たちは、心から喜んで、なみだを流しました。

それから2年ほどして、蛇口は新しく6つできました。村は、ずいぶん便利になりま  
した。又吉さんを中心に、村の人たちが力を合わせて作った『淡輪の簡易水道』は、大  
阪府の中でも2番目に早く作られた水道だったのです。

ほかにも、又吉さんは、村を豊かにするため、いろいろなことに取り組みました。

・村の人たちがお米がなくて困った時に、自分のお米70俵(お茶わんにして約3万杯  
分)を分けてあげた。

・暮らしに困っていそうなお家があることを  
知ると、夜中にそっと、げんかんのところ  
にお米を置いておいた。



- ・村の中の道路を、広くじょうぶにする工事をすすめた。
- ・今の銀行のようなものをつくり、村の人たちに貯金<sup>ちよきん</sup>をすることをすすめた。
- ・自分の土地を差し出して工場を作ってもらい、村の人たちをやとってもらった。
- ・村にあったお墓<sup>はか</sup>はせまかったので、広くきれいにした。
- ・警察<sup>けいさつ</sup>と協力して、安全で安心してらせる村にしていった。
- ・山に木を植える計画をすすめた。育った木を売ったお金で善照寺<sup>ぜんしょうじ</sup>をきれいにした。  
(又吉さんが植えた木は、今も育っている。)
- ・農業やしょうゆづくりをうまくすすめていくため、作業場と倉庫を作った。



1948（昭和23）年、又吉さんは79才でこの世を去りました。自分の財産<sup>ざいさん</sup>を差し出し、カナダやアメリカでの体験をいかして、30年以上も村のために力をつくしました。又吉さんの努力のおかげで、村の人たちのくらしは、ずいぶん豊かになりました。

又吉さんの活やくは国にも認められ、表彰<sup>ひようしょう</sup>をうけています。岬町でも、石碑<sup>せきひ</sup>を建て、『名誉町民<sup>めいよ</sup>』として又吉さんの功績<sup>こうせき</sup>をたたえています。

☆『岬町の偉人 堀田又吉翁』（1981年堀田又吉翁遺徳顕彰委員会・岬町教育委員会作成）と、紙芝居『出たぞ！水だ！』（2002年岬町人権教育研究協議会部落問題学習部会作成）を元に（挿絵・写真、及び本文の一部引用）、表現をわかりやすく変えたもの＜2010年度淡輪小学校第4学年＞